

鹿児島の風習的抜歯を探る

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
神経病学講座 人体構造解剖学分野

峰 和治

抜歯と聞けば歯科関係者のみならず、一般の人でも治療が第一の目的、と考えるのが普通であろう。それが考古学や人類学の世界では、全く違うイメージで捉えられる事が多い。昔の人があえて健康な歯を抜いていた事が、世界各地・各時代の遺跡から発掘される人骨の歯列を見ると分かるのである。麻酔も無い時代に苦痛を伴う行為をなぜ行ったのか。これまでの研究では、成人・婚姻・服喪といった人生の重要な通過儀礼に際して、あるいは所属集団や身分の表徴として、はたまたある種の審美性を追求して、などと様々な理由があげられている。このような抜歯は「風習的」という修飾語を頭に付けて総称され、歯科医療行為としての抜歯とは区別して扱われる。日本列島の各地域でも、縄文や弥生の昔には、盛んに抜歯を行っていた事が知られている。では、本土の最南端と島嶼部を包含する鹿児島ではどうだったのだろうか。

1950年代に九州大学などの調査団が、種子島の広田遺跡で弥生時代の人骨を発掘し、47体中40体に抜歯の痕跡を確認している。歯の欠損理由がカリエスなのか外傷なのか、それとも習俗なのか。その鑑別は、失われている歯の種類と数がひとつの型式を構成しうるかどうかが、という視点から始まる。広田の抜歯は片側の上顎側切歯を主対象とする、日本列島の中では一風変わった型式であった。その後も種子島では同型式の抜歯を施された人骨がいくつか出土したが、県内の他の地域からは一向に明確な抜歯資料が得られないまま、20年以上が経過する。

現在の人体構造学解剖分野の前身である口腔解剖学講座では、古人骨の形態研究を主要テーマにしていた。県や市町村が実施する発掘に参加するなど、地域密着型の活動を通じて、1980年からの18年間に鹿児島・宮崎両県を中心に1000体以上の古人骨調査に携わった。その中で、鹿児島県本土と奄美諸島周辺の抜歯事例を

少数ながら追加する機会に恵まれた。地域貢献と言うには少々古い話になるが、この誌面を借りて紹介させていただきたい。

1991年、肝属郡高山町（現在の肝付町）に所在する古墳時代後期の北後田地下式横穴墓から見つかった若年女性の人骨が、上顎右側第1小臼歯の抜歯と推定された。当時の人類学会では、弥生時代に盛行した抜歯が古墳時代に入っても存続したのか問題になっていた。北後田例は、外からは見えにくい第1小臼歯を対象にした衰退期の抜歯型式に当てはまり、古墳時代の鹿児島で抜歯習俗が存続していた事を示唆する1例となった。また、左側の第1小臼歯に見られた歯冠破損については、抜歯操作の失敗が原因として疑れた。

1993年、トカラ列島宝島の大池遺跡で、弥生時代の箱式石棺墓から熟年女性の人骨1体が出土した。種子島・屋久島と奄美大島の間に点在するトカラ列島は、九州本土と南西諸島との人的・文化的交流の中継点でもある。本例は短頭・低顔・低身長という南島弥生人に共通する身体的特徴を持つとともに、上顎左側の側切歯部に抜歯が施されていた。広田遺跡に代表される種子島の抜歯型式は独自色が強いと言われてきたが、少なくとも奄美大島のすぐ近くにまで分布範囲が広がっていた事を示す1例であった。

垂水市の椋原貝塚から1995年に出土した縄文晩期の熟年男性人骨1体と、1997年に出土した縄文後期の熟年女性人骨1体に犬歯の抜去が認められた。男性例では上下顎4本の犬歯、女性例では上顎左右の犬歯2本が抜歯されていた。犬歯を左右対称的に抜くのは縄文時代の本州や九州に広く見られる型式で、九州南端の大隅半島にも縄文後期にはこの風習が伝わっていた事を物語る所見であった。

この他、年代の確定が難しかったり、断片的だったりした資料として、種子島上浅川遺跡の頭蓋（上顎

左側側切歯の広田型式)、徳之島西ミヤド遺跡の下顎骨(3例のうち、1例が左右中切歯の抜歯)、奄美大島下山田遺跡の下顎骨(左右中切歯の抜歯)、の3例がある。筆者は以前、沖縄の出土例や徳之島の既報人骨の再検討を通じて、下顎中切歯の抜去が奄美以南の南西諸島中部圏に固有の型式、言わば奄美・沖縄型として存在した可能性を提示した。とは、その考え方の補強材料となった下顎骨である。

以上のように、鹿児島の抜歯地図に数ポイントを記す事はできたが、これに時間軸を重ね合わせれば、まだ情報が希薄である事は否めない。この地の古代人の精神世界や社会構造を推察する資料としても、抜歯所見の追加が望まれる。また、北後田例の歯冠破損から提起された抜歯操作の技術的問題に迫る作業には、歯科学的知識や診断法の適用が欠かせないと思う。

